特集

小児外科

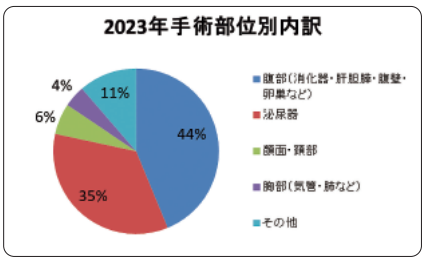
■小児外科医長　中原　康雄

はじめに

当院の小児外科は、1974年に開設され、約50年に渡り岡山県および周辺地域のお子さんの外科治療を担ってきました。日本小児外科学会の認定施設に指定されており、緊急症例にも常時対応できる体制にしております。小児外科で治療する病気は、先天性の場合と、後天性の場合があります。多くの新生児外科疾患は先天性ですし、頻度の高い疾患である鼠径ヘルニア・停留精巣も先天性の範疇です。一方で虫垂炎などの救急疾患、小児がんの多くは後天性になります。多彩な希少疾患を専門的に治療するのが小児外科の特徴といえますが、機能を再建する必要がある疾患に対しては、生涯にわたり問題の生じないような手術を施行することが重要です。また、若手小児外科医の育成を、島根大学、倉敷中央病院、四国おとなとこどもの医療センター、山口県立総合医療センターなどの中四国の施設と連携して行っており、一人一人のお子さんに最良の治療を提供できるように、一同、日々研鑽に励んでいます。

小児外科で扱っている疾患および治療

胸腹部から泌尿生殖器まで幅広く、手術が必要な小児疾患の診療を行っております。手術件数は年間500－600例くらいで中四国では最多となっています。



新生児外科疾患

当院は総合周産期母子医療センターに指定されており、新生児外科疾患の治療経験も豊富です。新生児期に手術を要する疾患の多くは、出生前に超音波検査で異常を指摘されることが増えています。その場合は、ご家族には病気と治療、そして予想される経過について正確な情報を知っていただき、少しでも不安を和らげることができるように医師、看護師、臨床心理士など多職種が関わりサポートをしています。分娩方法や時期を計画し、出生後の検査で病気の診断が確定すれば、手術等必要な治療を行います。横隔膜ヘルニアなどの高度な集中治療管理が必要な疾患は、新生児科の協力のもと治療を行うことになります。我々は、できるだけ赤ちゃんの体に負担が少なく、合併症のない、そして長期的に機能予後が良好な手術術式を選択するようにしております。複雑な疾患の修復手術は、多段階で行う必要がある場合も少なくなく、長期のフォローを要しますが、一人一人のお子さんの成長発達をご家族とともに見守りながら診療していきます。

肝・胆・膵疾患

新生児、乳児期早期の便色が薄い場合は、胆汁うっ滞性疾患の可能性を考慮し、精査が必要となります。特に胆道閉鎖症では、できるだけ早期の根治術が望ましく、健診等で微妙な便色に気付いた場合は早めにご連絡をいただきたいと思います。胆道拡張症はほとんどが膵・胆管合流異常を伴っており、将来の悪性腫瘍発生を防ぐために可及的早期に手術を施行しております。当院では腹腔鏡もしくは開腹で、肝外胆管の切除と肝管空腸吻合による再建術を施行しています。

小児悪性腫瘍

小児がん認定外科医と小児科の小児血液腫瘍専門医とで協力して治療を行っております。神経芽腫、肝芽腫、腎芽腫に代表される固形腫瘍の治療は国内の研究グループのプロトコールに準拠して行っております。肝芽腫や腎芽腫の治療成績は非常に良好ですが、近年では高リスクの神経芽腫も他施設と連携することで向上してきております。また、カンボジアの小児がん治療にも協力しています。

泌尿生殖器疾患

閉塞性尿路疾患、膀胱尿管逆流症の他、尿道下裂や総排泄腔異常などの複雑な先天異常の治療に力を注いでおります。治療に難渋するような複雑な疾患の場合は県外からもご紹介いただく場合があります。また総排泄腔異常に関しては、国内でも治療経験の豊富な施設の１つで、その最良の治療法の確立を目的として、第１回（2023年）と第２回（2024年）の総排泄腔異常シンポジウムを岡山で開催いたしました。

腎移植

当科では小児腎不全外科診療として腎移植も行なっており、小児科清水先生、腎臓移植外科藤原先生、泌尿器科医師と協力し2020年４月から現在まで19例の小児腎移植を

行なっております。日本では年間100例前後の小児腎移植が行われておりますが、低体重児や排尿機能異常合併症を有するなど、治療困難な小児腎臓病患者に対し小児腎移植診療を提供できる施設が少なく、近畿地方から中国四国地方の小児腎臓科医から当院に腎移植希望の患者さんをご紹介いただいております。また、近年全国的に脳死下臓器提供は増加傾向にあり、さらに小児の脳死ドナーから小児患者への優先的な臓器提供がなされるため、当院でも献腎移植登録を積極的にお勧めし、2020年以降11例の患者さんに献腎移植を行いました。腎移植のみならず、腹膜透析や血液透析、さらに小児神経疾患や代謝疾患に対する血液浄化療法も積極的に行っております。中四国をはじめ、西日本の小児腎臓病患者さんに高度な腎不全診療を提供できるよう、引き続き尽力いたします。

参加いただいた先生方との集合写真

鏡視下手術

美容的に優れ、拡大視野で手術を施行することが可能であり、小児においても広く行われるようになっています。当科での手術の約20％が鏡視下手術です。腹腔鏡、胸腔鏡、膀胱鏡、高精細外視鏡などを用いております。種々の疾患に対応していますが、慎重に適応を判断し、患児にとってメリットが大きい場合に選択しております。

東南アジア医療支援

ミャンマー、カンボジア、ラオスなどの発展途上国の小児外科医療を、ジャパンハートと連携して、長年にわたり行ってきました。現地に渡航して手術を施行することが多いのですが、特殊な治療を要する場合は当院で治療を施行する場合もあります。現在までに現地、および当院で400件以上の手術を施行してきました。2023年は複数の小児外科医師が７度、カンボジアに渡航し５件の肝腫瘍切除、４件の腎腫瘍切除などの小児悪性腫瘍手術の他、多くの高難度な手術を施行しています。

ヤンゴン小児病院での手術（2024年）

スタッフの紹介

令和６年度は、小児外科医師５名（中原、高橋、向井、浮田、高田）が常勤として対応しております。加えて青山興司先生（名誉院長）と後藤隆文先生（前副院長）、花木祥二朗先生にも週に１-２回お手伝いいただいております。

高田　浮田　中原　向井　高橋

〈医長〉
中原　康雄（小児外科指導医・専門医、外科専門医、小児がん認定外科医、小児泌尿器科学会認定医）
高橋　雄介（小児外科専門医、外科専門医、移植学会移植認定医、小児泌尿器科学会認定医、臨床腎移植学会認定医）

〈常勤医師〉
向井　　亘（小児外科専門医、外科専門医）
浮田　明見（小児外科専門医、外科専門医）
高田　知佳（外科専門医）

〈非常勤医師〉
花木祥二朗（非常勤）
青山　興司（名誉院長）
後藤　隆文（前副院長）

おわりに

新たな知見、技術、新しい医療機器を取り入れながら、よりよい小児外科医療を目指して日夜診療に励んでいます。小児外科に相談したいと思われる患者さんがおられましたら、いつでも対応しますので、ご連絡ください。